

令和5年度

# 人権作文集 第53集

差別をなくする輪をひろげよう市民運動

入賞作品集



三木市・三木市教育委員会

表紙の作品

「人」

三木特別支援学校

小学部 4 年

西村麗奈さんの作品

## はじめに

昨今、世界では気候変動による自然災害や地震、感染症の流行、さらに、武力による衝突や突然の侵攻など、人々の暮らしが脅かされる状況が続いています。国内においても障がいのある人や高齢者への差別、家庭内でのDV、児童虐待、ネット上での誹謗中傷などが後を絶ちません。差別や偏見は「無知・無関心」から始まるといわれます。これらの問題を自分には関係のない「どこかの、だれかのこと」にしないで、まず自分のこととしてとらえることが大切です。

この人権作文集は、多くの市民の皆様が、人権に関する諸課題に関心を寄せて真剣に向き合い、創作したポスター・標語・作文の中から、優れた作品を掲載したものです。一人一人が日常生活の中で体験したことや感じたことが豊かな感性で表現され、人権を大切に生き方を私たちに示唆してくれます。

この作文集を学校、家庭、職場などにおける人権教育・啓発活動に広く活用していただき、思いやりの心あふれる人権尊重のまち、三木市をもっと創ってまいります。

結びに、多くの作品をお寄せいただきました皆様をはじめ、審査員の皆様に心からお礼を申し上げます。

令和六年二月

三木市長 仲田 一彦

もくじ

★令和五年度「差別をなくする輪をひろげよう」市民運動入賞作品★

【ポスターの部】

《優秀賞》

三樹小学校 二年 永井 希織・平田小学校 四年 藤川 陽生  
自由が丘中学校 三年 田中 駿伍

《優良賞》

志染小学校 二年 藤本 望叶・緑が丘小学校 五年 石川 湊太郎  
別所中学校 二年 福岡 桃子

《佳作》

口吉川小学校 三年 井上 育己・広野小学校 二年 竹中 仁菜  
平田小学校 六年 玉木 翔大・別所小学校 六年 藤原 一成  
三木東中学校 三年 柴田 京佳・別所中学校 三年 小西 陽菜乃

《次点》

広野小学校 一年 源内 杏寧・吉川小学校 二年 真造 未羽  
吉川小学校 三年 石野 駈 緑が丘小学校 三年 湯本 羽蒨

12

11

10

9

別所小学校 四年 岡本 怜大・自由が丘小学校 六年 岩田 咲  
 自由が丘東小学校 六年 峰 心晴・自由が丘小学校 六年 小口 芙優  
 自由が丘中学校 一年 北野 希実・三木中学校 二年 三枝 咲穂  
 緑が丘中学校 三年 成瀬 愛彩・別所中学校 一年 田中美彩花

★造形作品★

三木特別支援学校 「花火」 (中学部作品) ..... 14

【標語の部】

小学生の部 ..... 15

《優秀賞》

自由が丘小学校 二年 籠 拳申・口吉川小学校 六年 岩崎 唯

《優良賞》

三木小学校 一年 田原 蒼翔・吉川小学校 六年 今村 澄音

《佳作》

志染小学校 一年 大西 市香・緑が丘東小学校 三年 杉田 大誠  
 緑が丘東小学校 四年 浅井 柚月・自由が丘小学校 五年 大谷 愛翔



【作文の部】

小学生の部

《優秀賞》

すぐ行動

別所小学校 四年 前田 采音……………18

色覚異常はおもしろい

平田小学校 五年 竹下 征吾……………21

《優良賞》

あいさつはまほうの言葉

口吉川小学校 四年 岸本 愛梨……………24

私の弟

三樹小学校 五年 武田 結和……………27

《佳作》

たすけ合いの心をもって

口吉川小学校 三年 中上 ちひろ……………30

相手の気持ち、考えてから

志染小学校 四年 橘田 大輝……………33

私の妹

吉川小学校 五年 山田 芽生……………35

みんなに平等な人権を

広野小学校 六年 楠本 花梨……………38

中学生の部

《優秀賞》

二歳の妹に教えてもらったこと

三木中学校 三年 三宅 和音……………41

《優良賞》

無責任な発言

三木中学校 三年 山本 沙綾子……………45

《佳作》

高齢化社会を生きる私たちにできること

三木東中学校 三年 清瀬 七瑞……………48

戦争のない平和な世界を

自由が丘中学校 三年 三宅 ゆいか……………51

PTA・一般の部

《優秀賞》

自分らしく生きられる未来へ

別所小学校 PTA 野垣 由佳……………55

《優良賞》

あの子との出逢い

別所中学校 PTA 藤本 江利子……………59

《佳作》

ほんの少しの勇気を

自由が丘東小学校 PTA 中川 かおる……………62

親子の会話

別所小学校 PTA 鶴井 晴香……………64



☆令和五年度全国中学生人権作文コンテスト入賞作品☆

(明石・三木地区予選 優秀賞)

車いす生活を通して得たもの

緑が丘中学校 一年 芹生 綾那……………67

すぐそばのいじめをなくすために

緑が丘中学校 三年 平川 龍馬……………71

(明石・三木地区予選 奨励賞)

障がいについて

三木中学校 一年 片島 奏……………75

新聞を読んで思ったこと

三木東中学校 二年 田中 誠太郎……………78

フィンランドから学ぶ”平和”と”幸せ”

三木東中学校 三年 西岡 夢時……………82

安心して生活できる一つのマーク

別所中学校 二年 神澤 ここね……………85

あなたは「正しい」?

緑が丘中学校 二年 今枝 慶太郎……………88

解消されない男女差別	緑が丘中学校 三年 下山	純弥	92
誰もがくらしやすい社会へ	自由が丘中学校 二年 山下	梨杏	96
素晴らしい未来まで	吉川中学校 二年 板倉	花歩	99
自分の想いを	吉川中学校 三年 北山	さくら	102

「差別をなくする輪をひろげよう」

市民運動入賞作品

【ポスターの部】

《優秀賞》

ポスターの部



三樹小学校 2年 永井 希織



自由が丘中学校 3年 田中 駿伍



平田小学校 4年 藤川 陽生

《優良賞》



志染小学校 2年 藤本 望叶



別所中学校 2年 福岡 桃子



緑が丘小学校 5年 石川 湊太郎

《佳作》



別所小学校 6年 藤原 一成



広野小学校 2年 竹中 仁菜



三木東中学校 3年 柴田 京佳



口吉川小学校 3年 井上 育己



別所中学校 3年 小西 陽菜乃



平田小学校 6年 玉木 翔大

《次点》



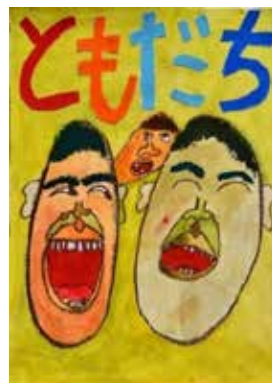
緑が丘小学校 3年 湯本 羽落



広野小学校 1年 源内 杏寧



別所小学校 4年 岡本 怜大



吉川小学校 3年 石野 駈



自由が丘小学校 6年 岩田 咲



吉川小学校 2年 真造 未羽



三木中学校 2年 三枝 咲穂



自由が丘東小学校 6年 峰 心晴



緑が丘中学校 3年 成瀬 愛彩



自由が丘小学校 6年 小口 芙優



別所中学校 1年 田中 美彩花



自由が丘中学校 1年 北野 希実



## 三木特別支援学校（中学部）の作品

# 『花 火』



円筒形の筒をはさみでタコの足ののように切ります。  
その足に絵の具を着け、スタンプングをします。綺麗な花火を思いながら絵を描きました。生徒は、思い思いに色どりを考え、個性豊かな作品を作り上げました。

「差別をなくする輪をひろげよう」

市民運動入賞作品

【標語の部】

# 標語の部

## 【小学生の部】

### 《優秀賞》

いろめがね ぼくのめがねは とうめいだ

自由が丘小学校 二年 籠 拳申

知らんぷり そんなあなたも いじめっ子

口吉川小学校 六年 岩崎 唯

### 《優良賞》

またあした いわれて あしたも たのしみだ

三木小学校 一年 田原 蒼翔

やさしさを バッグにつめて 登下校

吉川小学校 六年 今村 澄音

### 《佳作》

「いっしょにあそぼ」 これでみんな ともだちだね

志染小学校 一年 大西 市香

みとめあう みんながみんな ちがうよね

緑が丘東小学校 三年 杉田 大誠

やめようよ あなたのゆうきが 大じだよ

緑が丘東小学校 四年 浅井 柚月

分からない？ 笑っていても きずつくよ

自由が丘小学校 五年 大谷 愛翔

### 【中学生の部】

《優秀賞》 その言葉 あなたは一瞬 相手は一生

三木東中学校 三年 河合 花菜

《優良賞》 差別より 増やしていこう 思いやり

吉川中学校 二年 砂川 弘汰

《佳作》 人と人 心をつなぐ 言葉の系

緑が丘中学校 三年 長谷川 蒼空

勇気だし 声をかけよう だいじょうぶ？

自由が丘中学校 一年 藤本 すす

【PTA・一般の部】

《優秀賞》 認め合う 優しさ繋がる 多様性社会

吉川 中学校 P T A 西垣 眞喜子

《優良賞》 SNSより 目の前の君に 「いいね！」しよう

三樹 小学校 P T A 松尾 由紀

《佳作》 その言葉 自分に向けて 言えますか

自由が丘 小学校 P T A 吉原 真之

本当に 言っていないかな その言葉

別所 中学校 P T A 川田 かな子



「差別をなくする輪をひろげよう」

市民運動入賞作品

【作文の部】

## 【小学生の部】

### 《優秀賞》

#### すぐ行動

別所小学校 四年 前田 采音

四年生のある日の帰り道のことでした。私ที่บ้านに帰る道の途中で、おばあさんが段ボールを捨てに行こうとしていました。そのおばあさんは、たくさんの段ボールを持っていたので、とても重そうでした。私は「助けてあげようかな。段ボールを持ってあげようかな」と思ったその時、おばあさんは持っていたダンボールを落としてしまいました。私の住んでいる所はとも田舎なので、車や人があまり通らず、そのおばあさんを助けてあげる人はいませんでした。私は段ボールを拾おうとしているおばあさんの様子を見て、「大変そうだな。手伝おうかな。でも恥ずかしいな」と思いましたが、「無視して通り過ぎるわけにもいかない。おばあさんがあんなに大変そうなのに考えている暇はない。いっしょに



拾ってあげて捨てる場所まで運んであげよう」と思いました。そして、

「持っていきましょうか?」

と声をかけると、

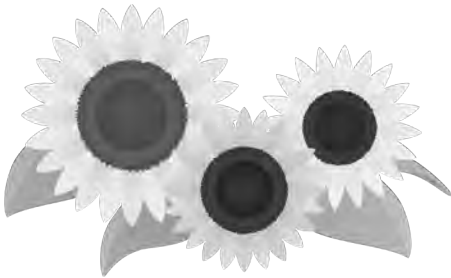
「ありがとう。じゃあお願いしようかな」

と言われました。その「ありがとう」の言葉を聞いただけでわたしの心の中がすごく温かくなりました。こんなに心がポカポカしたのは初めてでした。私は学校の帰り道でランドセルを背負っていたので、とても重かったけど、人のために動けたので笑顔で運ぶことができました。すると、おばあさんも笑顔だったのもっと嬉しい気持ちになりました。

実はわたしは前に同じようなことがあったのに、その時は何も行動できませんでした。だから、前回の反省を生かして、今回人のために動くことができて、とても嬉しかったです。初めて人を助けることができました。人に優しくすること、人を助けることは相手だけでなく、自分にとっても気持ちいいことだと改めて感じることができました。

人通りの少ない地域なので、今回わたしにとっては人を助けただけでなく、地域の人と関わることにしたい実は初めてのことでした。今回は段ボールのお手伝いだったけど、もしかしたらこれから事故など、もっと大きなでき事に会おうかもしれません。そんな時で

も今回の経験を生かして、今後絶対に「見て見ぬふり」をする人にならずに、「すぐ行動」できる人になりたいです。そして、たくさんの人を助けてあげられるような人になりたいです。



## 《優秀賞》

### 色覚異常はおもしろい

平田小学校 五年 竹下 征吾

ぼくは、目に色覚異常を持っています。色覚異常というのは、色の見分けがつきにくいことです。色覚異常は生まれた時から持っていて、十人に一人はなると言われています。ぼくは軽しうだけど、一生治りません。目には赤・青・緑の三つの細ぼうがあります。その赤・青・緑の細ぼうの内、緑の細ぼうが不足しているというのを病院の先生から聞きました。それを聞いたとき、とてもがっかりしました。ぼくの好きな緑色が見えにくいです。一つの細ぼうが少ないと、けっこうたくさんの方が分かりにくいです。例えば赤と茶色のちがいが分かりにくいため、肉が焼けているか焼けていないかが分かりにくいです。このように色覚異常になると、日常生活でこまることやできなくなることが出てきます。兄と遊んでいて、色のこともめたりしたことがあります。ゲームをしている時、ぼくの作っていた家について配色センスがないと言われました。最悪だと思いました。何色か

分からず、友だちと話が通じなかったこともありました。また、理科の実験のとき、テープの色のちがいが分からず、プリントに記入することができなかったこともあり。図工で、赤と青と黄色を使って鬼の絵を描くじゅ業がありました。その時、赤と茶色をまちがえて茶色を使いそうになりました。そんな時、みんなと見え方がうなと思いいシヨックでした。

色覚異常は治りません。一生つきあっていかなくはいけません。人と見え方がちがうので、ぼくがいいと思っても、他の人には、そのように見えないことがあります。赤と茶色が同じ色に見えたり、特にまぜ合わせた色は、他の人とちがって見えたりすることがあります。自分と人が思っている色がちがっていたら、色を聞いたり、言っている色に合わせたリすると、まちがえることも少なくなりました。でも、見え方がちがうのは仕方ありません。ちがう色で見えたりまちがえたりしても、まあいいかとひらきなおっています。

最近、ぼくは気づいたことがあります。ゲームのマインクラフトで家を作っている時に、ぼくはとてもきれいな家を作ることができました。でも、作ったきれいな配色をぼくが見ると同じように他の人は見ることができないということです。こんなにきれいなのに、みんなは見ることができないのかと、みんなはそんなをしているなあと思いました。そんな

ふうにと考えると、色覚異常もおもしろいなと思います。色はみんなちがって見えるけど仕方ありません。これから一生つきあっていかなくてはいけないので、前向きにつきあっていけたらいいなと思っています。そして、ぼくだけに見えるきれいな色を大切にしていきたいです。



## 《優良賞》

### あいさつはまほうの言葉

口吉川小学校 四年 岸本 愛梨

わたしは家でも学校でも、「おはよう」「さようなら」「いただきます」「ごちそうさまでした」など、いろいろなあいさつを毎日かならずします。ほかに、「ありがとう」「ごめんね」という言葉を使う場合もあります。あいさつをすると相手の気持ちがとてもよくなるし、自分も明るい気持ちになるので、あいさつはとても大切な言葉だと思います。お父さんとお母さんは、

「知らない人や地いきの人などに会ったら、かならずあいさつをしようね」

と、わたしによく言います。これから中学生や高校生、大人になるにつれて今よりもたくさんの人との出会いがあります。知らない人にも自分から声を出してあいさつをすることで、周りの人たちと自分の心を少しでもちぢめることができるから、あいさつはとても大事なのだそうです。

わたしは、小学校に入学するずっと前からともはずかしがり屋で、はじめて出会う人の前では、お母さんの後ろにかくれることが多いです。一年生になっても、今よりも少しはずかしがり屋だったと思います。だから、学校でも自分からあいさつがあまりできませんでした。三つ上のお姉ちゃんがいるので、お姉ちゃんがいさつをした後に続いて小さい声であいさつをしていたのを覚えています。でも、その時はあいさつをしても何とも思っていないくて、どうしてあいさつをしないといけないのか、ぎ間に思っていました。お母さんに聞いてみたら、

「大人になっても、はじめて出会う人にあいさつをしたり声をかけたりするのは、はずかしいし、ゆう気があるよ。でも、それはきつと相手も同じ気持ちだと思うよ。たった一言声をかけるだけで、そこからだんだんなかよくなれると思うよ。」

と言っていました。そこで、わたしは少しずつゆう気を出してお母さんやお姉ちゃんに続いて大きな声であいさつをするようになりました。すると、だんだんよい気持ちになって、それまでよりいろいろな人と話ができるようになりました。友だちがふえたりしました。一年生のころにあいさつをしても何も思わなかったのは、わたしの声が小さくて相手に声が聞こえていなかったせいで、相手はわたしがむしをしていたかと思っていたのかもしれない

ん。

四年生になった今は、自分からすすんで大きな声であいさつができています。大きな声  
であいさつすると、相手からもあいさつが返ってきて元気をもらえるので、あいさつは人  
と人をつなぐまほうの言葉だと思えます。さい近はマスクを外す人がふえて、おたがい  
の顔がよく見えるようになりました。だからこそ、相手の顔をしっかりと見て、え顔と大き  
な声で自分からあいさつすることを今までい上に大事にしていきたいです。





## 《優良賞》

### 私の弟

三樹小学校 五年 武田 結和

私の弟には、障がいがあります。それは「発達障がい」という障がいです。

発達障がいの特ちょうは、他人との関係づくりやコミュニケーションなどが、とても苦手なことです。しかし、優れた能力が発揮される場合もあります。

私の弟は、きょうりゆうにくわしかったり、覚えるのがとても早かったりします。それが能力です。他の人とは少しちがうところもありますが、弟はがんばっていると思います。その行動や態度は「自分勝手」とか、「変わった人」「困った人」と思われてしまうかもしれません。しかし私は、発達障がいに対する私たち一人一人の理解が大切だと考えます。私の弟は、思い通りにいかないとすぐおこってしまいます。昔は、よくたたいたり、かんだり、ひっかいたり、あばれたりしていました。

でも、今ではおこることがあっても、たたいたり、かんだり、ひっかいたり、あばれたりす

ることが少なくなりました。気持ちの切りかえも早くできるようになり、クールダウンする場所を見つけ、気持ちを落ち着かせています。そんなときの弟は、相手とコミュニケーションが上手くとれず、思っていることを伝えられなくて心がモヤモヤしているのだと思います。かんたんなコミュニケーションはとれるようになってきましたが、どう伝えていいかわからない時にはオウム返しになることもあります。人が思っていることを感じとるのがまだまだ苦手な弟ですが、この前、お友だちと遊んでいるとき、おもちゃをゆずってあげていたのを見て、すごくうれしかったです。

弟の良いところは、字が読めないのに、一回で聞いて本を覚えて読めることです。それきょうりゅうの名前やへびの名前を覚えることなど自分の興味があることには、私よりも能力が優れていてすごいと思います。また、すぐに「ごめんね」と言った後に、弟の心の中で気持ちがおさまらない時もあり、目をつぶって落ち着かせることもあるけれど、すぐに「ごめんね」と伝えられる弟には、いつも感心します。

弟は、来年小学一年生になります。周りのかんきょうや人ががらりと変わるので、私は心配しています。パニックをおこしたり、いきなり気になったところに走って行ったりと、みんなをビックリさせることをたくさんするけれど、弟にはたくさんいいところがあります。

発達障がいの特徴を理解してもらうことは、とてもむずかしいことだとは思いますが、周りの関わり方で弟はのびのびと過ごせることを私はお母さんや保育園の先生を見て感じました。

弟や、発達障がいのある人が過ごしやすいように、たくさんの人に弟の苦手なことも、良いところも知ってもらいたいです。



## 《佳作》

### たすけ合いの心をもって

口吉川小学校 三年 中上 ちひろ

わたしは、みんながなかよくすごせるようにするためには、たすけ合いが大切だと思います。もし自分がたすけてもらったらとてもうれしいし、「ありがとう」というかんしゃの言葉が出るからです。また、わたしがだれかをたすけたら、よろこんでもらえてうれしくなるし、人にやさしくできて自分も気持ちもスツキリするからです。

わたしが二年生の時のうん動会のできごとです。ときよう走のとちゅうで、わたしはこけてしまいました。れんしゅうの時はいつも一いだったのに、本番の時だけはこけてしまったので三いになりました。わたしは、それがとてもくやくしてないていました。でも、プログラムがおわってから、走るじゅん番をまっていた友だちや先に走った友だち、いっしょに走った友だちにも、

「大じょうぶ？さい後までがんばったね」

とやさしく声をかけてもらいました。わたしは、その言葉のおかげでホッとしてうれしくなり、さい後まであきらめずに走りきってよかったと思いました。もし、ないている自分だれも声をかけてくれていなかったら、プログラムの後もずっとないていたかもしれませんが、友だちのやさしい心があったから、つらいことをのりこえられたのだと思います。

ふだん、わたしはお母さんのお手つだいで、せんたく物をほしたり入れたりたたんだりすることがあります。ほかにも、ごはんを作ったり用意をしたり、そうじきをかけたりすることがあります。お手つだいがおわると、いつもお母さんが、

「ありがとう。たすかったよ」

と言ってくれます。その一言を聞くとてもうれしくて、お手つだいでよかったなと思うし、これからお手つだいをしようという気もちになります。

人とたすけ合うと、その人と気もちがつながってなかなかなれるし、それまでよりもよいかんけいが作れると思います。そして、思いやりの気もちがつたわり合って、おたがいがあたたかくしあわせな気もちになれると思います。もし、みんなが今よりほんの少しでもたすけ合いの心をもってすこすよくなれば、今よりもっとしあわせになれると思います。だからわたしは家でも学校でも、これからも思いやりの気もちをわすれずにごし

たいです。そして、こまっている人やないている人を見かけたら、その人のためにできることを考えて、声をかけたり行動したりすることが出来る人になりたいです。



## 《佳作》

### 相手の気持ち、考えてから

志染小学校 四年 橘田 大輝

ぼくのクラスの学級目標は、「あたたかいクラス〜自分と相手を大切に〜」です。この学級目標は、たんにんの先生が考えてくれました。

ぼくは、みんなが助け合って、みんなを大切にしているクラスが「あたたかいクラス」だと思っています。この目標のように、ぼくはみんなを助けたり、相手を大切にしたりしています。でもあまりできていないこともあります。それは、「相手の気持ちを考えてから話す」ということです。カッとなってしまうと、ついきつい言葉で言うてしまうことがあります。相手はもちろんいやな気持ちになると思うけど、ぼくもいやな気持ちになります。だからイライラした気持ちのまま話をせずに、少し時間をおいてから、話をしたりして、相手がいやな気持ちにならないように気をつけたいと思います。

ぼくは今のクラスは前よりけんかがへっていいクラスだと思っています。なぜなら、みん

なが、学級目標である「あたたかいクラス」をめざして、行動できていると思うからです。ぼくは、この前、国語の音読をまちがえたときに、だれかが思わずクスツと笑ったように感じました。前までならその場でけんかになって自分も相手も悲しい気持ちになってしまっていたけど、カツとならずにかまんできました。もし、ちがう友だちが発表でまちがえて、だれかが笑うことがあれば、「まちがえたことを笑ってはいけないよ」と注意してあげて、その友だちも自分も大切にできるように声をかけたいです。

これから、今以上にあいさつをみんなまでできて、勉強や行事などで、みんなが協力して、いつも元気で楽しいクラスというふんいきがでたら、みんながやさしい気持ちでいられて、もっといいクラスになると思います。みんなのやさしさがいつばいつまった「あたたかいクラス」にしていきたいです。そのために、ぼくは、相手の気持ちを考えて、やさしい言葉をつかい、友だちにやさしくできるようになりたいです。



## 《佳作》

### 私の妹

吉川小学校 五年 山田 芽生

私の妹は今五歳ですが、三歳の時から眼鏡をかけています。

三歳児健診に行った時、保健士さんに、

「見えにくそうだけど、家で見えにくそうにしているんですか」

と言われました。家ではぬり絵を線からはみ出さないようにぬったり、小さな虫を見つけたりしていたし、見えにくそうではなかったです。でも、心配なので念のために眼科へ行ききました。すると、屈折異常弱視と言われたそうです。そして、眼鏡をかけることになりました。

初めて妹が眼鏡をかけて帰ってきた時、家族が走って妹に駆け寄りました。

「大丈夫？見える？」

「これから大変やな」

などと言って、みんな妹を心配しました。出かけていろんな人に出会う度、

「眼鏡、大変やね」

「小さいのに辛いな。かわいそうに」

などと言われました。妹は、何か言われる度に「うん」とうなずいていました。

ある日突然、妹が、

「わああー！」

と大きな声で泣いたことがありました。理由を聞くと、

「みんなが心配するのがいやなの」

と言いました。私も妹が眼鏡になって心配し過ぎて、見えているのかしつこく確認していたことがあります。例えば、妹の目の前に立って、

「これは何本でしょう」

と自分の指を使ってクイズを出したことがあります。その時も妹は、

「それは分かるー！」

と、悲しそうな顔をして答えました。

「これは見えるんだ」

とその時私は、無意識に言いました。でも今思うと、意識はしていなかったけど、妹を傷つけていたんだと思います。

眼鏡をかけ始めただけで妹は何も変わっていないのに、自分も周りの人も、妹に対しての対応が心配するように変わりました。みんな妹を構いすぎていました。相手のことを思っただけで思ってしまったことでも、相手にとっては嬉しくないことだったり、しんどくさせてしまうこともあったりするのだと知りました。

この経験をもとに、私は自分の思いだけで行動するのではなく、相手の気持ちを聞いたり考えたりしてから行動することを目標にしています。まだまだ相手の気持ちを想像しきれずに行動してしまう時もありますが、どのように相手を感じているのかを考え、相手の思いを大切にしていきたいと思います。そして、傷ついている人が少しでも少なくなるように、みんなで見んなのことを考えて過ごしていきたいです。

未来の世界では、傷ついている人がいなくて、みんなが笑顔で幸せを感じられるような世の中になってほしいです。いろいろな思いや気持ちに気づかせてくれた妹。これからもお互いに相手の気持ちを考えて、感謝しながら、様々なことにも気づき、学び合い、一緒に生活していきたいです。

## 《佳作》

### みんなに平等な人権を

広野小学校 六年 楠本 花梨

私は今、社会で日本国憲法について学習しています。その学習で憲法の三大原則について知りました。そして、その中で一番心に残ったのが「国民主権」でした。国民は、みんな生まれたときから権利があります。障がいのある方は、たとえ権利があつたとしても、「車いすが他の人のめいわくなるので、お店に入らないでください」などと言われてしまうことがあることを知りました。障がいのある方は自分で望んだわけではないのに、車いすに乗っているからという理由でいじめられたり、いやがらせを受けたりすることもあるそうです。国民全員に権利があるのに、めいわくだと断られるなんて、三大原則の意味があるのかなと感じました。

例えば、目が見えない方だったら、ちゃんと訓練された盲導犬や白杖を使います。でも、目が見えていないことや、盲導犬が仕事中にほえないことを利用して、盲導犬をいじめる

事件もあるそうです。そして、目が見えない方は、「自分の目が見えさえすれば、犬がいじめられないのに」と自分を責めてしまい、家から出られなくなってしまう。私はいやがらせをしている人の気持ちがありません。目が見えない方の思いや気持ちを考えたり知ったりしたら、いやがらせをする人もいなくなるのになと思います。

私は、白杖を使って歩いている方を見たことがあります。その時に、点字ブロックの上で自転車が置かれているのを見ました。私は「自転車を動かして道を空けようか」と考えましたが、すぐに行動することができませんでした。すると、男の方が走っていき、自転車を移動しました。私は心の中で男性に拍手を送り、「私もあの人と同じように、すぐ行動できる人になろう」と考えました。思っているだけでは解決しません。すぐに行動できることが大切だと分かりました。もし次に同じような場面があったら、私が行動します。そして、みんながその男性の行動に気づいて、手伝えるような世界になってほしいなとも思っています。

国民主権。みんなが楽しく生活できる権利だからこそ、みんなが助け合って、みんなを守っていかなければいけないのだと思います。私は家族とも権利について話し合いました。席をゆずったり、声をかけたりすることは私にとって勇気があることです。でも、みんな

なの権利を大切にするために、勇気を振りしぼってみます。そして、日本や世界中のみなが平等に権利をもち、誰でも助け合って生活できるような世の中になってほしいと強く願います。



【中学生の部】

《優秀賞》

二歳の妹に教えてもらったこと

三木中学校 三年 三宅 和音

私には、十二歳離れた妹がいます。すぐかわいいい妹です。今まで一人っ子だった私はきょうだいがほしいと思っていました。六年生になったある日、母に、

「お姉ちゃんになるよ」

と言われ、とまどいつつもとてもうれしかったことを覚えています。でも妹には障がいがあります。生まれつき、頭と心臓、のど、ろっ骨、じん臓に病気があり、定期的に病院に通っています。体の病気以外にも、体の機能や頭の発達に遅れがあり、二歳になった今も歩くことができず、「ママ」などの簡単な言葉を話すことができません。ご飯は七か月くらいの子の赤ちゃんが食べる離乳食で、おかゆや形がなくて、きざんだりしたものでな

いと、むせてしまいます。

妹は、母のお腹にいる時に異常が見つかり、詳しい検査をして遺伝子の病気があることが分かりました。その時、病院の先生は、

「一か月以内に赤ちゃんを産むか、あきらめるかを考えてください」

と母に告げたそうです。私は当時六年生でした。母は、私に相談があると言って赤ちゃんの病気について話しました。

「病気があるのはたしかだけど、具体的に体のどこにどんな病気があるかは生まれてくるまでわからない。もしかしたら、発達障がいもあるかもしれない。生まれてみないとわからないことだけど、お姉ちゃんとして、弟か妹に障がいがあったらどう？嫌？」

と聞きました。私にとって、母に言われた言葉は凄く難しく、私はすぐに受け入れることができませんでした。しかし、やっと母のお腹に芽生えた命が私の判断一つでいなくなってしまうことはとても悲しくて嫌でした。沢山の時間をかけて考え、私の思いを聞いた父と母は産むことを決めました。

生まれてから、妹は新生児特定集中治療室で管理治療が必要とのことで入院していたため、長い間退院することができませんでした。約三か月後、妹はやっと家に帰ってく



ることができました。初めて抱っこをした時、私はお姉ちゃんになれたことを実感しました。障がいがあってもなくても、私をお姉ちゃんにしてくれたのは妹で、大切な家族です。これから先、歩いたり、走ったり、話したりできるようになるのかはまだ分かりません。しかし、妹は妹のペースで少しずつ成長していて、言葉は話せなくても、にこにこ笑ったり、拍手をしたり、私たちが話している言葉が少し分かったりします。抱っこをしてほしい時やおやつがほしい時には、手を出したり、声をあげたりして訴えてきます。妹は一生懸命伝えようとしているのだと思います。そんな妹の姿を見て、私は妹がどうしてほしいのか、何を伝えようとしているのか、と考えるようになりました。

世の中には、さまざまな障がいや病気がある人がいます。皆私の妹のように、誰かの大切な家族で、一生懸命生きている人たちです。つまり障がいがあってもなくても、みんな一人一人が誰かの大切な存在だということを妹を通して実感することができました。

私は、自分の妹だから障がいがあってもただ、かわいい、大切だと感じているからこそ、妹のためにと行動できるのかもしれない。でも、これから障がいのある人に出会った時、この人は何に困っているのかな、手伝えることはあるかなと積極的に考えられる人になりたいと思います。また、見た目には分からない障がいがある人がいるということも妹が

生まれてきてくれたからこそ知ることができ、障がいや人権について考える機会となりました。私は、妹が生まれてきてくれて本当に良かったと思っています。

最後に、私の妹をかわいそうだと思わないでください。人それぞれ得意・不得意があるように、妹も一緒です。一生懸命生きています。そんな妹に恥じないように、私も今を一生懸命楽しんでいきます。



## 《優良賞》

### 無責任な発言

三木中学校 三年 山本 沙綾子

みなさん、二〇二三年三月に行われたWBCを覚えているでしょうか。この大会で日本は三大会ぶりの三度目の優勝を果たし、大盛り上がりでした。MVPに輝いた大谷選手や十三打点で大会記録を更新した吉田選手、侍ジャパンのムードメーカー、ヌートバー選手など他にも多くの選手が活躍しました。

そんな中、私が注目したいのは村上宗隆選手です。日本の最年少三冠王で「村神様」の愛称で親しまれています。しかし、大会序盤、村上選手は不調に苦しみました。三冠王で期待も大きかった分、私も衝撃が大きかったことを覚えています。SNS上では、「村上選手頑張れー」「信じているぞー」などの励ましや応援コメントもありましたが、一部では「村上下げろ」や「何やってんの？」などの心ないコメントもありました。

でも、私たちの不安を裏切り、村上選手は打順を一つ下げて臨んだ準決勝・メキシコ

戦でサヨナラ逆転タイムリー、決勝・アメリカ戦で同点ホームランを打ち、日本の優勝に大きく貢献しました。すると、SNS上では、お祝いコメントであふれ返りました。これには批判コメントをしていた人たちも「手のひら返し」の反応を見せていました。

この一連の流れを見て、私は自分の発言に責任を持てる人間になりたいと思いました。先ほどのような批判コメントをするような人は自分の意見を持たず、目の前で起こったことだけで発言しています。

また、このような批判コメントは村上選手本人にも届いているはずです。いつもと違うことは本人が一番理解していると思います。他の人の何倍も何十倍も練習を重ねてやってきて、好き勝手言われることはとても辛いと思います。

私はバレーボールをしています。野球と同じチームスポーツです。試合中私がミスしたとき、チームメイトは私のもとに寄って来て「次！次！」「おしかつた！切り替えていこう！」と励ましの言葉をたくさんかけてくれます。だから私は自分の力を信じて、次のプレーも自信を持ってすることができます。もし私がチームメイトから「何でミスするん？」「他の人と代わってほしい」と言われたら、立ち直れる自信がありません。村上選手はそれを何千何万件と受けているので辛さは私とは比べものにならないと思います。私もプロ

の選手も同じ人間です。できること、できないことが違ってても心があるのは同じです。口の選手だからといって心が強いのでしょうか。何を言っても良いのでしょうか。いいえ、違います。辛いときこそみんなて手を取り合って支えてあげませんか。ワンフオーオール・オールフオーワンという言葉があるように、普段私たちは村上選手に勇気づけられています。だからこそ、村上選手が辛い思いをしているときは私たちは私たち観客が勇気づける番です。誰だって周りから応援があれば頑張ろうと思えるはずです。

感動の裏には闇の部分が潜んでいました。SNSは自分の意見が気軽に書けます。逆に言えば、書いてしまう場所です。匿名でひどい批判の言葉でも無責任に発言ができてしまいます。でも書けるからといって、悪口や嫌なことを書いていいところではありません。人生の時間は限られています。限られている時間の中で使う言葉は美しく優しいものになるように日々心がけたいです。言葉には力があります。私はそれは良いことだと信じています。だからこそみんなが美しい言葉を使い、優しい世界が広がることを願っています。

## 《佳作》

### 高齢化社会を生きる私たちにできること

三木東中学校 三年 清瀬 七瑞

日本の認知症患者は約六〇二万人。二〇二五年までに、高齢者の五人に一人が、認知症を発症するといわれています。そもそも認知症とは、脳の働きが徐々に低下し、社会生活に支障をきたす状態のことを指します。忘れたくない大切な記憶を忘れてしまうかもしれない恐怖と隣り合わせに生きる認知症患者は、私たちには、はかり知れない日々の葛藤があるはずでず。そんな認知症を私が知ったきっかけは祖母でした。

私の祖母は最近物忘れが激しいです。初めは笑ってごまかせる小さな物忘れだったのですが、最近では、私が思わず「えっ」と耳を疑う重要なことも忘れてしまうことがあります。そんな祖母の姿を見るたびに「昔はあんなにしっかりしていたのに」と現在と過去の姿を比べてしまうことがあります。そして、その度に人の記憶をむしろおぼろげに覚えていく認知症に対しての恐怖を覚えます。いつか私の名前や家族一人一人のことを忘れてしまうので

はないか。祖母自身の名前や年齢も忘れてしまうのではないか、とても怖かったです。しかし、物忘れがはげしくなってしまったとしても容姿、喋り方、声などが変わるわけはありません。私の慣れ親しんだ祖母は祖母のままです。それに、祖母には絶対に忘れないものがあります。それは私の「好物」です。「私が来たとき用に」と常備しているそうです。そして私が久しぶりに祖母の家に行った時に、それを笑顔で渡してくれます。笑うことは記憶力アップにつながるらしく、祖母に会ったら、たくさん一緒に笑うようにしています。ここで伝えたいことは、認知症になったからといってその人のすべてが変わるわけではないので、偏見の目で見るのではなく今までと態度を変えずに接するべきだということです。

先日、祖母の家に行った時、洗濯物がとりこまれていたので、私が畳んであげようとする、母から、

「できることは自分でやらせてあげて」

と言われました。介護福祉士をしている母によると、自分でできることは自分でさせてあげることが認知症の進行を防ぐために一番効果的だそうです。つまり、手助けしてあげることだけがいいのではなく、時には、その人の持っている能力を信じ、見守ってあげることも大切なサポートの一つなのです。現在の医療では認知症を根本的に治す治療はあ

りません。しかし、周囲の環境による認知症の進行スピードは異なると私は思います。高齢者への正しい対応を示す介護士十戒の中には、できるだけ自分でやるように仕向ける。失敗を責めない。「だめ、ダメ、駄目」は駄目。などといったことが記載されています。認知症の介護においては強制や行動の制限は絶対にしてはいけません。本人の意思を尊重するべきなのです。そのためには、介護する側の心の余裕が必要とされており、社会全体の介護する人をサポートする制度が必要不可欠なのです。介護する人、される人にとって住みやすい社会とは一体何なのか。それを追求して実現することが今を生きる私たちの任務だと思っています。

「年寄りを笑うな、行く道じゃ」という言葉があります。そう遠くない未来、私たちだって介護される側の人間になっているかもしれない。今や、年齢を重ねるうちに誰が認知症になってもおかしくないのです。そんな人に対して邪魔者扱いをするのではなく、高齢者、病気の有無、若い人、子ども、障がいがある人、外国人にもそれぞれに公平な立場を持たせることが人権を守ることだと思えます。そして、誰しも今後直面するであろう介護問題。今の高齢者の方々は私たちよりも遥かに社会に貢献してきたはず。これからはより一層感謝の気持ちを示しながら接しようと思えます。そのためには、誰もが高齢者との正しい接し方を知るべきなのです。



## 《佳作》

### 戦争のない平和な世界を

自由が丘中学校 三年 三宅 ゆいか

私のひいおばあちゃんは、九十二歳で戦争の体験者です。私は、ひいおばあちゃんに戦争の話について聞きました。

昭和十六年十二月八日、日本はアメリカ合衆国の真珠湾を攻撃しました。それから四年後の、八月十五日に終わった戦争を大東亜戦争と言い、ひいおばあちゃんが実際に体験した戦争です。

大東亜戦争では、アメリカ軍による日本への攻撃が続き、ひいおばあちゃんの住む神戸市林田区が爆撃の被害を受けました。十四歳のひいおばあちゃんは、母と手をつなぎ、今でも名前を覚えている真っ黒に焼けた友だちの死体を、

「ごめんよ、ごめんよ」

と泣きながらまたぎ、新開地タワーを目標に歩いたそうです。学校に避難した後も爆撃

は続き、ひいおばあちゃんは床に伏せて、両手を顔にあて親指で耳を塞ぎ、小指を口の両端に入れ、三本の指で目を塞いでじっと耐えていたと言います。そうしないと、鼓膜が破れ目が飛びでて、舌を嚙んでしまうからです。

また、ひいおばあちゃんは十二歳、十三歳の頃、満州開拓義勇軍、従軍看護婦のお手伝いをするため、満州へ渡る予定でしたが、母に泣かれてあきらめました。その後、満州へ渡った子どもたちは全員、飢えや寒さで死んだそうです。学校へ行くのは贅沢と言われ、家に帰れないまま戦地に無理やり連れていかれる、そんな時代です。次に戻ってきた時は遺骨か、また骨さえも見つけられず、その人の手帳や鉛筆を渡されたそうです。

ひいおばあちゃんは戦争のことを、「人と人との殺し合い」と言います。

「誰もが互いに憎しみ合い、戦争を一度しかけたら一年や二年じゃおさまらない。どんどん広がる。戦争は怖い。そして残酷や」

と。そして、

「平和が一番」

と言いました。私もそう思います。戦争を一度始めてしまうといろいろなところで争いが起こってしまうと思います。誰もが憎しみ合い武力で解決する戦争は絶対に起きてほし

くないと、私も思っています。普段はいろいろな話を話してくれるそんなひいおばあちゃんですが、戦争の話について語るひいおばあちゃんはとても真剣でした。

私は、ひいおばあちゃんの話聞いていて、それぐらい記憶に残るような体験をしたんだと本当に思います。何十年たっても忘れることはない。体験者の中に残り続ける当時のつらさや怖さ。そして思えば、今の私たちが聞いて想像しているものよりもずっとずっと強いものなのだと改めて感じました。ひいおばあちゃんも言っていました。「戦争は経験しないと分からない」と。

今までも、「戦争は怖いもの」や「戦争はしてはいけないもの」と言われていて、子どもたちにそれを伝えていくために、実際に戦争を体験した人のお話を学校で聞いたことがあります。でも、実際その時体験者がどんな思いでどれだけ怖い・つらい体験や経験をされたのか、私にはわかりません。私は、体験した人にしか分からない戦争の怖さ、つらさを教えてもらうのではなく、自分で考えをもち、興味をもち、知ろうとすることが大切だと思います。

戦争は、罪のない人々の命を奪ってしまうとても残酷なことです。去年のニュースで、ロシアがウクライナを侵攻したという報道がされました。ウクライナの人々が、いつ爆弾が

落ちてくるか分からない毎日を怯えながら過ごしているのをテレビで見ました。世界中のどこかで戦争によって誰かのあたりまえの日常が奪われたらと考えると、とても怖いです。

私は戦争がなく、憎しみ合うことがなく、誰もが笑顔であたりまえの日々を過ごすことができる世界になってほしいと思います。戦争がどれだけ悲しいことか、また、この世界では生きている人の命はすべて平等でとても尊いものだということを少し考えてみてほしいと思っています。まだ若い命が戦争によってうばわれてしまう世界にはなってほしくありません。

【PTA・一般の部】

《優秀賞》

自分らしく生きられる未来へ

別所小学校 PTA 野垣 由佳

今回「自分らしく」というテーマを決めて作文を考えていた時に、自分の身近な体験で感じたことがあったので、それについて書いてみようと思いました。

私は美容師をしています。お店には年齢問わずいろいろなお客様が来てくださっています。最近のお客様の傾向が昔と今で変わってきていると感じることがありました。

まず、今までのお客様の要望が多かったのは、その時の流行の色や髪型であったり、女性のお客様は女性のヘアカタログ、男性のお客様は男性のヘアカタログから髪型を選んでという流れが普通でした。今もそういうお客様は多いのですが、それに加えて最近増えてきた例というのが、性別を問わない髪型を希望されるお客様が増えてきたことです。

ある日、女性のお客様が来られて希望したいと見せてくださったのが、刈り上げの入った男性のショートカットの写真だったということがありました。昔だと、

「えー刈り上げ？大丈夫？」

と思っってしまったかもしれませんが、その時担当したスタッフが言った言葉は、

「いいね！かっこいいね！」

でした。その言葉を聞いたお客様は、すごく嬉しそうな表情をされていました。カラーをされるお客様も、昔はその時に流行っている色をしたり、派手すぎない万人受けの色にしたりするお客様が多かったのですが、最近は鮮やかな色や、流行に關係なく自分のしたい色をされるお客様が増えました。施術する私たち美容師側も、いろいろな髪型、いろいろなカラーに触れる機会が増え、新鮮な気持ちで仕事ができることを楽しく感じています。

「本当はこんなのがしたいんだけど・・・」

と悩む人もおられますが、できる範囲で希望にお応えして、自分の本当にやりたい髪型にされたお客様たちは、皆嬉しそうな表情で帰ってくださるので、私も嬉しい気持ちになれます。

仕事以外でも最近身近に感じたのが、学校の制服の選択の自由です。近所の学校で制服のズボンを履いている女の子をよく目にするようになりました。最初見たときは正直驚いてしまったのですが、自分で選択できるのはとても良いなと思いました。

共通して感じたことが、自分の好きなこと、自分のしたいことを主張できる時代になってきたことです。昔の時代にも、女の子だけ刈り上げしたい、本当はスカートじゃなくてズボンの制服がいいな、と思うことは必ずあったはずですが、しかし、「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく、性別と違う格好をするのはおかしい」、などという認識の時代が長くあって、それに沿わない考えをなかなか受け入れない風潮にあったと思います。ですが、最近テレビやSNSで目にしたり耳にしたりする「多様化」や「LGBTQ」という情報のおかげで、性別や年齢問わず本当に自分がしたいことを主張しやすくなってきたと感じます。また受け入れる側も、抵抗なく受け入れやすくなってきたと思います。そうして一人一人の個性や趣向を皆が認めて受け入れていけば、差別や偏見も無くなることに繋がると思います。皆と違うから、普通じゃない、変だね、と悪い方に考えるのではなく、そういう考え方素敵！自分をしっかり持つてるね！など前向きな考え方ができれば、皆が明るく、仲良く過ごせる時代になると思います。

「自分らしく生きる」

これから大人になっていく子どもたちが自分らしく、生きやすい環境を作ってあげるのが私達大人の役目です。そのために今の自分ができることは、子どもを理解し、一緒に寄り添うこと。その先に成長した子どもたちが自分らしく、明るく生きられる姿が見られたいなと思いました。





## 《優良賞》

### あの子との出逢い

別所中学校 PTA 藤本 江利子

私は、ある男の子に携わり関わる機会がありました。その子は、〇、一歳児の頃から目が合わず、一人で遊んでいることが多い子でした。幼児になり、まわりの子どもたちは話ができるようになっていましたが、その子は違い、自分の思いを言葉で伝えることができませんでした。大人の注意、否定的な言葉にはすぐ反応し、注意、批判されたと思うと、後ろから噛みついてくるのが度々ありました。私は噛みついてくるその子に対し、今日も噛まれるかもと恐怖を覚えることもありました。家に帰り、足や手を見てみるとアザになっていることもあったからです。その子は思いを伝えることができず、してほしいことがあると、私の手をひっぱって呼んでくれます。私は、その子の思いに応え、その子の好きな虫を観察したり、パズルをしたり、歌を聴いたりしました。その子の好きなことを知り、一緒に見たりするなかで、その子は私に心を開いてくれるようになり、少しずつ言葉も

出てくるようになりました。言葉が出はじめ、自分の思いを伝えられるようになった頃から噛みつくこともなくなってきました。その子に対し、私自身も言葉をいい言葉に変換させて話すようにしました。

「それはダメ」ではなく、「それは大事」というようにプラスの言葉で伝えていくことで、その子自身、否定されていると思わなくなったのかもしれない。三、四、五歳と年齢が上がっていきましたが、その子と目が合うことはほとんどありませんでした。五歳になりその子は発達検査の結果、発達に障がいがあることが分かりました。その子の母親もすぐく悩んでおられたことを覚えています。でも、その子のできること、好きなことを話していく度に、その子の母親も笑顔になり、一緒にその子の成長を喜び合うことができました。私は、その子と一緒に過ごす日々がとても楽しく幸せな時間になりました。他の子とは違うと思われるかもしれない。でも、何ごとにも一生懸命なあの子。私はこの子と関わることでどうしてそうするのか？ということを考えられるようになった気がします。

小学生、中学生と成長していく度、その子の母親からお手紙を頂き、その子の近況を聞くことができました。絵を描くことが好きだったあの子は、支援学校で描いた絵がぶどうジュースのパッケージにされていました。すごく素敵な絵でした。今では、仕事に就き立

派に働いています。顔を見せてくれた時、やはり今でも目はほとんど合いませんが、立派になったあの子を見ると、涙が溢れそうになるくらい嬉しいです。あの子と出会えたことに感謝です。

私たちは健康であることが当たり前と思っている人も少なくないと思います。ですが、生まれつき何らかの障がいがあったり、事故が原因で体に障がいが残ったりする人もいると思います。障がいの有無に関わらず、すべての人がお互いの人権を、尊厳を大切にし、支え合う社会になることを願います。



## 《佳作》

### ほんの少しの勇気を

自由が丘東小学校 PTA 中川 かおる

私は三木に住んで十五年ほどになります。ここ数年でたくさん外国人を見るようになりました。

私は販売の仕事をしています。先日、平日の午前中に制服を着た中学生の男の子が、お母さんと一緒に買い物にきました。お母さんが日本語を話せないので、お手伝いをしてから学校に行くとのことでした。お母さんと私の間に入って一生懸命に通訳をしてくれるすっかりした子でした。とても感心しました。でも、そのお母さんに日本人の知人がいれば男の子は学校を遅刻せずに済んだのです。

病院で、子連れの外国人を見かけます。スマホの翻訳機能や身振り手振り症状を伝えていきます。「何か困っていないかな？何か手伝いましょうか？」と黙っていても、なかなか言えません。自分がかもしも反対の立場なら声をかけてもらおうと嬉しいはずなのに、毎回

勇気が出なくて後悔が残ります。

言葉や文化が違う国で、仕事や子育てをするのは大変なことがたくさんあると思います。特に子育ては、日本人の私でさえも不安になります。私の場合は、子育てひろばや乳児教室で相談してとても助けられました。ただ、そういった場所に参加しているのは日本人の親子がほとんどでした。外国人は孤立しているのではないかと心配です。子育て真っ只中の私に何かできることはないかを考え、一年前から、自由が丘公民館で子育て中の外国人に日本語ボランティアをすることにしました。シリア出身の若い女性を担当することになりました。子育て中で忙しい中、時間を作って一生懸命日本語を学び、話そうとします。私はシリアについて無知だったので、文化の違いをいろいろと知り、驚きの連続です。子育ての悩みだけは共通していました。

恥ずかしがり屋が多い日本人にとって、外国人に話しかけるのは勇気がいることです。

でも、外国人だからと躊躇ためらうことなく、まずは挨拶からでもいいので声を掛ける人が増えれば良いなと思います。外国人にとっても日本人にとっても、お互いを理解し合って暮らしやすい地域になってほしいです。

## 《佳作》

### 親子の会話

別所小学校 PTA 鶴井 晴香

ある日の私と子どもとの会話

「おはよう」

「朝ごはん食べなさい」

「着替えなさい」

「いつてらっしゃい」

「おかえり」

「ご飯の時間だからおもちゃ片付けなさい」

「早く食べなさい」

「お風呂入りなさい」

「歯みがきをしなさい」

「早く寝るよー。おやすみなさい」

やっと一日終わったと一息ついて、子どもの寝顔を見てふと気づいた。

『今日子どもたちは何をして遊んだのかな』

『今日一日注意ばかりしていたな』

といういろいろ反省してしまう。一方的に私が話していたが、これが親子の会話といえるのだろうか。考えてみれば、子どもとの時間は朝起きて一時間と夕方からの四時間。私の場合この五時間だけが子どもと会話できる貴重な時間なのである。

そんな貴重な時間に注意ばかりしていても、きっと子どもも母と話をすることが楽しくないだろう。そしてだんだん話さなくなるだろうと感じた。家庭は子どもがリラックスして過ごせる場所にしたいと思い、このままでは実現できそうにない。だからといってどうすれば良いかも分からないので調べてみた。

たくさんのポイントがあったが、私が実践できそうだと思ったことは『話し始めたその時に話を聴く』ということである。もし忙しくてじっくり話を聴けない時は無下にあらうことなく、

「ごめんね。今急いでこれをしないといけないから、これが終わったらお話を聴かせてね」

と子どもが傷つかないように気をつける。そして必ず用事が一段落したら、親の方から「さっき話しかけていたことは何？」

と声をかけるようにすると良いそうだ。また、その会話で『上手に相槌をうつこと』も大切だそうだ。

『うんうん』と聴いていることを伝える相槌。

『えー？そうかなあ』と否定的な相槌。

『そうだったの？』と確認のための相槌。

『それでどうなったの？』と話を進めるための相槌など、相槌にもいろんな意味を持ち会話を膨らますことができる。

まずは、このアドバイスを心に留めて実践していき、子どもたちが自由に発言し、居心地の良い環境をつくっていきたいと思う。一日五時間だけの親子の時間をすこしずつ充実した時間となるように、親として頑張りたいたいと思う。





令和五年度

全国中学生人権作文コンテスト入賞作品

(明石・三木地区予選 優秀賞)

車いす生活を通して得たもの

緑が丘中学校 一年 芹生 綾那

みなさんは障がい者の体験をしたことがありますか。車いすに乗ってみたり、目をかくして補助されながら歩いたりしたことはありませんか。私は実際に足をけがして、車いすに乗った時に感じたことを話していきます。

私は六年生の冬、体育の時間に走っている時に捻挫してしまいました。骨にひびが入っていて、足にギプスを巻いて、松葉杖や車いすで生活することになりました。とっても不便でした。わざわざ一階に行くのにも車いすをおしてもらって、エレベーターに乗って行かないといけないし、松葉杖で移動するのも体力を使うし、なにより、クラスのいろんな子に気をつかってもらっていたのがとても申しわけなかったです。でも、移動教室の時や手を洗いに行ったりする時もみんながすすんで

「車いすおしてあげようか?」

と言ってくれて、約三週間の車いす生活は特に問題もなく過ごせました。本当に私を気づかって、支えてくれたみんなに、感謝してもしきれないです。

他にも人の優しさを感じたでき事があります。その車いす期間の時、四校交流会というものがありました。中学校に入学する前に中学校を探検するということで、中学校に行きました。今では仲良く話しているけれど、その時は初対面だった他校の人とグループになって行動しました。その時グループの人が、すすんで車いすをおしてくれたり、グループの人だけでなく、いろんな人が、

「大丈夫？」

などと声をかけてくれたりしました。その時、「みんな優しいな」と人の温かさを感じました。他にも、今まで当たり前のようにあった学校のスロープや、エレベーターの車いす専用のボタンから、障がい者の方への配慮が感じとれました。エレベーターの車いすの方専用のボタンは、押しやすいように低い位置にあたり、そのボタンを押すと、ゆっくりとエレベーターが動くようになっていたりするそうです。その話を聞いた時、とても考えられている、すばらしい工夫だなと思いました。意識して考えると、点字や点字ブロック、音の鳴る信号など、たくさん工夫があるなと感じます。

しかし、障がいのある方への理解には、まだまだ不十分なところがあります。私はインターネットで、このような話を聞いたことがあります。聴覚に障がいのある方の話なのですが、補聴器を付けて自転車に乗っていた時に、

「イヤホンを付けながら自転車に乗るな」

と怒られたという話です。補聴器への理解が足りないからこそ起きた事件です。他にも、耳が聞こえないからいじめられるというアニメも見たことがあります。音楽の歌の時間にいじているグループが、わざと くち ロパクして、その子が一人で歌ってバカにされている内容でした。とてもひどくて陰湿なことをしているなと思いました。このように、障がいの者の方への配慮がたくさんある反面、障がいへの理解が深まっていないからこそ起きた、障がいの者差別があります。障がいの者を見て、「うわ、障がいの者やー」などと思う人もいます。

このような私の経験から、障がいの者が暮らしやすいようになっていく反面、障がいの者の方への偏見が絶えない部分もあります。障がいの者の方を尊敬している人の方が多いと思うけれど、まだまだ、理解できていない部分があるなと感じました。人間の体はすべてが必要不可欠です。その何かが欠けてしまっても、前を向いて強く、元気に生きている

障がい者の方を、とても尊敬します。むしろ、それを活かしている方は、すごいなと思います。この世に生まれてきた以上、みんな平等で、人間らしい生活ができなければなりません。生活の上でハンディキャップがある人が、障がいがない人と同じ生活ができないとただだと思えます。ましてやその障がいがあるだけで差別をされるなど、あつてはならないと思います。それをなくすためには、きちんと一人一人が、障がいについて深く知る必要があると思います。そして、すべての人が平等に生活できるようにしなければいいなと思います。

私は特別な体験をすることができませんでした。その生活はかなり大変でした。でも、周りの人が支えてくれたおかげで、難なく過ごせました。なので、障がい者の方や、困っている人がいたら、すぐに

「大丈夫ですか？」

と言える人になりたいです。

(明石・三木地区予選 優秀賞)

すぐそばのいじめをなくすために

緑が丘中学校 三年 平川 龍馬

よくテレビで流れるいじめのニュース。僕の学校はいじめなんて無縁だと思って、いつもなんとなく聞いていました。しかし、中学生になって初めて、自分の身近でいじめを目の当たりにしました。

僕のまわりにいる友だちは、いつも笑顔です。困っている友だちがいたら声を掛けて、お互いに助け合う、僕自身もいつも友だちにとっても助けられています。そんな友だちが、急に学校を休んだ日がありました。先生は、

「風邪を引いたみたい」

と言っていたけれど、前日のメールではいつも通りふざけて楽しく会話をしている、体調が悪いななんて話は全く出ていなかったから、おかしいと思ったのをよく覚えています。

その日の晩、僕は第三者を通して、友だちが学校を休んだ理由が「いじめ」であること

を知りました。同じクラスのA君が、授業中や一人の時をねらって、「死ね」という言葉を何度も何度もぶつけていたそうです。それは一日二日前に始まったことではなく、一ヶ月以上続いていたと知りました。どうしてすぐに友だちは僕に言ってくれなかったのだろう、僕は頼りなかったかなと、気付けなかった僕自身も情けなかったし、とても辛い気持ちになりました。

友だちが直接僕に話してくれたのは、それから少し経ってからです。僕に心配をかけたくなかったという友だちの優しさでした。

友だちに暴言を吐いていたA君は、僕にとっては、楽しく話ができるクラスメイトです。始めは「本当にA君か?」と不思議に思いましたが「死ね」という言葉は絶対に使ってはいけないと思います。一度出た言葉は取り消せません。言った人はふざけていただけだとしても、言われた人はずっとずっと心に残ってしまうものだからです。友だちはいつも休み時間に、復習など勉強を頑張っていました。すごいなと思うと同時に、勉強の邪魔にならないようにと声を掛けに行かなかったことが時々ありました。そんな時をねらって後ろの席だったA君は友だちに暴言を吐いていたそうです。

僕にできることはなんだろうと考えて、まずは先生に相談に行き、休み時間など友だ



ちが一人になることがないように、一緒にいるように心掛けました。先生が席替えて友だちのまわりを仲の良い子たちで固めてくれるなどして対応してくれたこともあり、

「席替え以降は大丈夫」

と笑った友だちにホツとしました。

A君は思うように成績が上がらないイライラを、休み時間に勉強をしている友だちにぶつけていたと先生から教えてもらいました。確認テスト、中間テスト、期末テストと、テストが多い中、成績が伸びなくてお母さんに怒られて、焦ってしまう気持ちも分かるし、自分は頑張っているのにと腹が立って、イライラしてしまう気持ちもよく分かります。しかしだからといって「死ね」という言葉をまわりにぶつけていい理由にはならないし、他人を傷つけることで自分のストレスを晴らすべきではありません。

友だちは、

「ありがとう」

と言ってくれたけど、つらい思いをした一ヶ月はなくならないし、もっと早く自分ができることはなかったのかと僕は自問自答を繰り返しました。

僕はこういった経験を通して、なぜいじめが起こるのか、疑問を持つようになりました。

僕のまわりで起こったいじめは、A君が勉強熱心な友だちをからかい始めたことがきっかけで起こりました。この経験から、いじめは誰かが誰かを「からかう」ことからスタートするということに思いました。

いじめを起こさないために、次の二つが大事だとわかりました。一つ目は、クラスでからかわれている子がいたら、すぐに先生に報告すること、二つ目は、誰かをからかうことは、一歩まちがうといじめにつながるからやめようという雰囲気を作ることです。悪いことを悪いと否定できる意志を持って、毎日を大事に過ごしていきたいです。

## (明石・三木地区予選 奨励賞)

### 障がいについて

三木中学校 一年 片島 奏

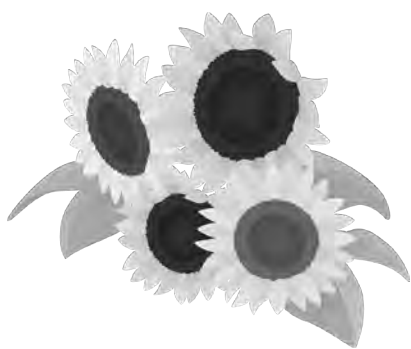
ぼくは、いままで障がい者の人たちのことを「かわいそうだな」と思っていました。なぜなら、ぼくたちが今、あたり前のようにしていることを障がいがある人は、だれかの力をかりないといけないと思っていたからです。けれど、いま思うと、かわいそうではないと思いました。なぜなら、障がいがある・ないにかかわらず、人それぞれ生きている意味があると思います。それからです。それに気づかせてくれたのは、ぼくのいとこのS君です。S君はアンジェルマン症候群という障がいがあります。アンジェルマン症候群とは重度の発達の遅れ、言葉が出ない、てんかん、容易によく笑う、動き方がぎこちないなど、主に神経系に関連した症状が見られる遺伝性疾患です。これだけを聞くと、とても大変そうだなと思います。しかし、そのいとこの家族は、みんな明るく、大変そうではありません。その家族はみんなS君のできないところを助けて、そのS君にしかできないことで、みんな明るくさせ、笑顔

にしてください。

ぼくは、S君と遊んでいていやな思いをしたことがありません。逆に、楽しい気持ち、うれしい気持ちになることができます。さらに、S君のお母さんに聞いたところ、S君には、多幸症という症状があります。かたんに言うところ、多幸症は漢字の通り、どんなことでも幸せに感じるという症状です。例えば、ぼくのお父さんの面白くないギャグでも、S君は腹をかかえて笑います。そして、それにつられてみんなも笑顔になります。S君は生活の中で人より何倍もたくさん幸せをみつけることは、とてもすごいことだと思います。S君は、速く走ることも、計算することや話すこともできません。だけど、ぼくや、まわりの人を笑顔にしてくれます。ぼくは、話すことも、走ることも計算をすることもできるけど、ぼくは、S君のようにまわりを明るく、笑顔にすることはできません。ぼくは、バスケットボールをしています。レギュラーの人（試合に出ることができる人）もいれば、ベンチの人（試合に出ていない人）もいます。ぼくを教えてくれたコーチは、出ている人が偉いのではなく、みんなが一つのチームだと言っていました。背の高い人がいたり、背の低い人もいたりします。ぼくと同じ顔で同じ性格の人もいません。みんなちがいます。なので、人それぞれにも役目があると思います。また、人それぞれにだれにでも、良いところや悪いところ

ろがあると思います。それに、人それぞれの価値は、できることの多さや、できないことの多さで比べることはできないのだと思います。なので、障がいがある・ないにかかわらず、一人一人できることがちがい、生きる意味が人それぞれいろいろな形であるのだと思います。障がいがあることで、障がいがない人に比べれば、大変なところがたくさんあると思います。

ぼくは、S君の家族のように、できないことはみんなで助け合い、支え合って、のりこえていく世の中になっていったらいいなと思います。



(明石・三木地区予選 奨励賞)

新聞を読んで思ったこと

三木東中学校 二年 田中 誠太郎

僕は、ある新聞の記事を読みました。その記事は、「憲法詩について解きほぐす」という見出しでした。私たちの生命と人権を守り、日本ですべての法律の基礎となる大切なものだと分かっている、とつきにくい印象のある憲法。難解に感じる条文を詩の言葉として解きほぐし、憲法のしんにあるものをそっと差しだすようにしてまとめた「日本の憲法 最初の話」という本が出版されたという記事でした。

著者は、白井明大さんです。前文の出だしは「日本国民は」ですが詩訳は「私は決めた」で始まっています。「日本国民は」と書き出しから引っかけりを感じて、日本国民とはだれかと考えたら『私』そして『あなた』だと思ったんです。この白井さんの言葉を読んで僕は、日本国憲法のこと、平和のことも、人権のことも、「僕」が自分のこととして考えられるかどうか考えさせられました。日本は平和で、僕や僕の周りの人については人権は侵

害されていないとまでは言えませんが、他の国や地域に比べてよっぽど少ないと思います。でもそれは、僕が全体的にそう感じているだけで、本当はどうなのか？自分のこととしてあまり考えていないからではないか？日本国憲法の前文なので、当然続きがあります。僕が思うことがある文は、二つあります。その中で一番心に残った、共感した部分が二つあります。

一つ目は、「平和を守って人が人を暴力的に支配したり、奴隷にしたり、存在を押しつぶしたり、偏見に満ちたひどい扱いをしたり、そういうことを地上から永遠になくそうとがんばっている国々の集まりの中で、私たちは胸を張れる仲間でありたい。そう思う」この文の中で僕が大切だと思っているのは、「私たちは胸を張れる仲間でありたい」です。

その理由は、暴力や一方的な支配や差別を世の中からなくそうと頑張っているのは一人じゃないということです。「私たち」と一人だけのことではなく国民のみんなで努力しようという言葉を入れていくからです。日本の国からなくす、と考えると僕にはできそうにありませんが、僕の周りから、クラスから、学校からと考えると僕にもできることはたくさんあります。「胸を張れる仲間」と書いている中の「仲間」という言葉も国民みんなを日本の仲間と言っていることから、暴力などのない日本にして、胸を張って「本物の

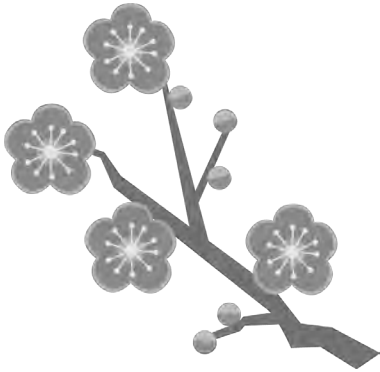
仲間だ」と言えるように努力しなければいけないということです。平和は、日本の国民全員が努力して手に入れていくことだから、僕の周りの学校のクラスの和も、僕たち一人一人の努力で作っていかなくてはいけないのです。暴力や差別はなくして当たり前ではなく、努力してそれらのない世の中を作っていくものなのです。努力をやめたとき、きつと日本は戦争にまきこまれ、僕の周りにはいじめや楽しくない学校生活が出てくると思います。僕は、自分の思っていることに賛同してくれて、応援してくれる仲間がいると安心するし、嬉しくなります。僕も、周りの人に対して同じように賛同し、応援することで、きつと平和な日々が作られる、そう解釈しました。白井明大さんの思いとは違うかもしれませんが、日本国憲法の前文の原文を詩訳された文を僕は以上のように思いました。

二つ目は、「この世界の国の誰もが一人の例外もなくおそろしい目にあわず貧しさから抜け出して、平和な日々を生きる権利を持っているんだということ念のためここで言っておく」です。これは、もうすでにこのことを誰もが知っているからこのようなことを書いていると思えました。こんなに当たり前の誰もが望んでいることでも、いじめや差別、戦争が起これると、たちまちそのことが守れなくなるのです。また、平和な日々を生きる権利、つまり人権を人が持っていて当然なのに。しかし、その当然、当たり前が失われること



があるから、今も人権について考えたり、白井明大さんのように人が守るべきであること  
をもう一度見直し、多くの人々にわかりやすいように詩に書きかえ、それを本に出して  
出版する人がいるのでしょうか。

この、たまたま見た新聞の記事からいろいろなことを考えさせられました。日本国憲  
法にこのような前文があることも、内容も知りませんでした。でも、この詩訳を読んで僕  
たちを守ってくれるべき憲法は、つまり自分たち（国民）が努力して作っていく日本とい  
う国について書かれていることがよく分かりました。



(明石・三木地区予選 奨励賞)

フィンランドから学ぶ”平和”と”幸せ”

三木東中学校 三年 西岡 夢時

平和な世界にする。それが今、人類の最大の課題となっています。では、「平和」とは何のことだと思えますか。気になって辞書で調べてみると、「戦争や争いがなく、世の中が穏やかな状態であること」とありました。それでは、どうしたら戦争や紛争がなくなるのか考えてみました。僕の中で出た答えは、みんなが幸せになればいいということです。幸せになれば、みんな自分に満足して争いが起きなくなると思ったからです。それで僕は「フィンランド」という国が頭に思い浮かびました。昔、世界の国々について興味をもって勉強した時に、世界で一番幸福な国はフィンランドだと記憶にあったからです。そこで、世界一幸せな国、フィンランドから平和な世界にするために大切なことを学んでいこうと思えます。

まず、フィンランドはどんな国なのか紹介したいと思います。この国は北欧に位置する自然が豊かな国で、サンタクロースが住む町がある場所としてよく知られています。フィ

ンランドは、日本と比べて比較的自由な国でありながらも、治安や学力が世界トップクラスです。この国を一言で表すと、最新の福祉国家です。福祉国家とは、医療保険、福祉サービス、貧困層への補助などの社会保障制度の拡充を重視し、実現している国家のことです。例として、政治界をあげます。フィンランドの政治は、日本の政治とかなり違って、まず、政治家と仕事のダブルワークが可能です。また、選挙に出馬するために必要な供託金が不要、そんなことから、女性の国会議員が約半数を占めたり、二十代、三十代など若い人たちがかなり活躍しています。このことから、年齢や性別、身分など関係なく、みんなが平等に暮らせることが幸せな理由だと思いました。

また、フィンランドは自らのライフスタイルに合わせて働けるという点があります。受験制度がなく、教育費が大学までほぼ全て無料で、自分で考えるという思考力に関するテストがほとんどです。大人になっても、日本に比べて有休日数や育休日数が多く、通勤時間少なめ、残業がほぼなしとなっており、世界で最もワークバランスが整った都市として選ばれました。このように、人生の選択肢の自由さが、また幸せにつながっていると思います。平等と自由、これさえあればみんなは幸せになれるだろうか。世界が平和になります。世界の中から争いがなくなるだろうか。よく考えてみると、平等と自由、両方を実現さ

せるのは難しいのではないかと思います。自由を優先すれば、制度がなくなり、何かやりたいと思えばすぐに実行できる反面、平等という秩序が守れなくなってしまう。かといって平等を優先しても、平等という制限にしばられて自由になれなくなる。つまり、平等と自由は対立しているのです。

では、どうしたら世界が平和になれるのでしょうか。それは話す力、詳しく言うと思わす力をつけることだと僕は思います。なぜなら、話す力には、仲介する力があるからです。それこそ今、フィンランドやEUは和平交渉をして、紛争解決に取り組み続けています。そして実際にインドネシアでの武力戦争を防ぎました。また、人だけでなく、物事も仲介できます。なぜフィンランドは平等と自由、どちらも実現できているのでしょうか。それは何人ものが、会議で話し合って平等と自由のバランスを調整しているからです。フィンランドには外務省に「仲介チーム」という組織があるほど話すことに力を入れています。また、話すときに相手を納得させるために必要な思考力をみがくために、知識力のテストではなく、思考力のテストを国の子どもたちにさせていたならば筋がとおります。もし、話す力で世界が平和に、私たちが幸せになれるのなら、今、できることが私たちにもあるのではないのでしょうか。

## (明石・三木地区予選 奨励賞)

### 安心して生活できる一つのマーク

別所中学校 二年 神澤 ここね

世の中には自分の状態を知らせるマークがたくさんあります。私は最近マークのことを調べる機会があり、そのいろいろなマークの中からヘルプマークというカードがあることを知りました。

ヘルプマークとは、外見からは分からなくても日常生活をするうえで何らかの困難がある人や、周囲の人に「支援や配慮を必要としている」ということを伝え、サポートしてもらいやすくするためのマークです。ヘルプマークは、年齢、性別、障がいの有無、文化などの違いにかかわらずなく、誰もが地域の一員として支え合う中で安心して暮らすためのマークです。一人一人が元気に活動できる社会づくりの取組として作られました。

私には七十八歳になるおじいちゃんがあります。つい最近まで普通に暮らし、元気に仕事にも行っていました。そのおじいちゃんが病気でたおれました。救急車で運ばれたまま入

院することになりました。でもコロナなどの影響もあり、半年間会えないままでした。退院してきて初めて会ったときにはすっかり変わってしまった姿に驚きました。病名は脳こうそくで、いろいろな後遺症が残りました。たおれる前日まで仕事に行き、普通に生活し、何でも一人でできていたことが、今ではたくさんのことを誰かに手伝ってもらわないとできなくなってしまうました。リハビリの成果が出て少しはできることも増えていましたが、足や手が不自由になってしまったので、外出した際は、周りの人の助けが必要なときが出てきます。そんなとき、おじいちゃんが、

「買い物にも一人で自由に行かれへん」

と悲しそうに言いました。すっかり元気のなくなつたそんな姿を見て、少しでも前のような生活をする方法がないか調べていたときに、ヘルプマークのことを知りました。ヘルプマークが作られた理由は落ち込んだおじいちゃんを笑顔にしたいなどの明るく元気にさせたい気持ちが進められているのかなと感じました。ヘルプカードは必要な援助や配慮を書き込むことができるようになっていきます。それを使用することで、少しでも行ける所やできることが増えたらいいなと思いました。使用する本人も、そのマークをつけていることで安心して外出できるようになるのではないかと考えます。一度、少し離れた所か

から見守りながら、ヘルプカードを持ったおじいちゃんの買い物練習をしました。レジの方がカゴを運んでくれたり、お金を出すのを手伝ってくれたりしました。その後、一人で行けたことがすごくうれしかったようで喜んでいたので、私までうれしくなりました。私もレジやお金を出したりすることを手伝ったことがあります。ヘルプマークというマークを知ったと同時にこのマークがあればおじいちゃんのような人でも安心して気軽に外出できるなと感じました。

私はこの身近なできごとを体験して、ヘルプマークがもっとたくさんの人に認知され、一人での外出に不安がある人でも、安心して外出できる世の中になってほしいなと感じています。そして私も、マークをつけていない人でも困っている人がいたら進んで声をかけて助けを必要としている人の力になりたいです。

(明石・三木地区予選 奨励賞)

あなたは「正しい」？

緑が丘中学校 二年 今枝 慶太郎

みなさんは「正しい行い」をしたことがありますか。自分が正しいことをしている、と思ったことはありませんか。誰だって一度は思ったことがあると思います。前提として、「正しくない行いをしたい」と考える人はあまりいないでしょう。ですが「正しい行い」とは何なのでしょう。はたして決まったものなのでしょうか。

戦争をもとにして考えてみました。現在、ロシアとウクライナの戦争が続いています。もともとはロシアの侵攻をきっかけに始まった戦争で、ウクライナはやむを得ず対抗している、という理解が世間の一般的な考えです。よく自身、その解釈は間違っていない、と思っています。しかしある日、テレビでこんな言葉を耳にしました。

「ウクライナが正しい。まちがっているのはロシアだ」

初めて聞いた時は特になんとも思わないまま、確かに、と軽い気持ちで聞き流しました。



その頃のぼくの頭には、悪いのはロシアだ、と固定観念が根づいていました。始めたほうが悪いのだと。一切の疑問を抱かないまま、テレビの言葉に賛同しました。

今、思い返してみると、ちょっとだけ「あれ？」と感じることがあります。社会を学ぶことで、ぼくの考え方が少し変わったからでしょうか。

「正しいのはウクライナだ」

この言葉について、どこか妙な違和感を覚えました。しばらくの間、違和感の正体は分かりませんでした。

「本当にウクライナが正しいのだろうか」と。もちろんウクライナが全面的に悪いとは思いません。自分の命を守るための行動です。ただし「まちがっていない」と「正しい」は同じではないと思います。バツではないにしろ、マルでもありません。ぼくはマルの戦争なんて存在しない夢物語だと考えています。自分の大切な人を守るために立ち向かうことは、「攻撃」ではなく「防衛」です。ウクライナにはこの言葉があてはまると考えます。

では、ロシアが正しいのか、と言われたらそうではありません。前述の通り、正しい戦争があるはずはないのです。戦争自体がまちがっていて、たとえ命を守るための最善策だったとしても、代わりにだれかが傷つくことになるのです。自分の命を守れば、代わりにだ

れかの命が消えていってしまうのです。その考えて見ると、ウクライナは正しくないし、さらに言えばまちがっている、と取れます。けれどそうしないと自分の命が失われる。同時にまちがっていない、とも取れます。戦争を始めたのはロシアですが、両方同じです。正しくないしまちがっているし、まちがってはないのです。

この考えから、ぼくはどちらも正義ではないという結論に至りました。どちらが悪いのかと訊かれたらロシアだと答えてしまうかもしれませんが、ならばどちらが正しいのか、と尋ねられたらぼくはきつと答えることができないでしょう。戦っている理由は、「自分が正義だと信じているから」です。お互いが正義を掲げ、お互いの正義に反対する。ここから大きく広がって、命が正義のために乱雑に壊されていくのです。人間は正義のためならば、手段を選びません。もちろんぼくも例外ではなく、懸けるものや慈しみが増せば増すほど、冷酷に、そして残酷になってしまいます。きつと誰もが同じなのです。

正しさは人によって違います。アニメやドラマの悪役のように、それぞれに思うところがあるはずです。主人公の正義と悪役の正義は異なり、統一されたものではありません。全ての人間が正しいのです。

しかしさつき考えた通り、「正しくないしまちがっているし、まちがってはない」という矛

盾もまた事実。人は自分が正しいと思っているけど他の人にとっては正しくないこともあり、まちがっていると言われるけど自分ではこれで合っていると思っている。人と人との考えが交差して、主張を押し通そうとするのです。

つまるところ、「正しさ」なんて存在しないと思いましたが。正義は無限にあります。どれも正しくありません。絶対ないと思うのです。

じゃあどうすればいいのか。そのために心はあります。目は自分自身にうったえるために、耳は苦しみの声を聞くためにあるように、心はそれらを総合したものです。まずは周りをよく見て、自分に問いかけてみる。次に誰かの声を聞いて、話し合ってみる。解決への第一歩はここから始まるんだと思います。

自分の正義と他人の正義。それはだれかを傷つけたり、あるいは自身にとって毒となるかもしれません。だから、周りを見て、自分なりに意識を変えてみればよいと思います。全ての問題は、そうやって解かれていくのです。

(明石・三木地区予選 奨励賞)

解消されない男女差別

緑が丘中学校 三年 下山 純弥

世間に、男女差別を無くそうという風潮が起こり出してから幾歳月、表面では皆、「男女差別は良くないこと」という考えを見せているが、実際はどうか。もちろん、雰囲気のみ差別が無いように見えているだけでは良くない。事実が伴わなければならぬ。

国連の調査によれば、男女の差別がどれほど残っているか、というランキングにおいて日本は下位。他国よりも色濃く男女差別が残っていることが分かる。

そう、日本において男女の差別は全然解消されていないのだ。昭和、平成の頃と比べると、まだ「マシ」なのかもしれない。だがそれでいいのか。

僕が日々過ごす中で、よく「これは男女差別じゃないかな」と感じることもある。その幾つかを説明する。

一つ目が、学校の制服である。男子はズボンで女子はスカート。男子は学ラン。このよう

に男女で服の規定が異なっているのだ。その他、髪形などにいたるまで、男女違った決まりが見られる。これは差別に他ならないのではないか。男子に対する偏見、女子に対する偏見。これが今も残っていることは問題だと思う。近年、本校においてもだが、女子がズボンをはいても良いとか、男女の制服を同じにしよう、また、私服登校を許可しようとしている学校が所々ある。この動きがさらに広がれば、偏見は緩和されると思う。

二つ目が、男子や女子、性別によるイメージである。よく聞くのは、「男子は外で遊びなさい」とか「女子はこういう遊びをしている」といった明らかな偏見である。仮にそういったイメージをもっていたにせよ、実際に言葉にするのはどうだろうか。男女差別の助長につながっていると思う。これとつなげて、最近の選挙運動でも同様のことが起きている。ある候補者が、「女性の政治家として……」という発言をしているのをテレビで見ることがあった。僕はこれを一つの、女性に対する偏見だと感じた。女性の政治家は少ないから、女性の政治家として政治に携わりたい。では、政治家に男性も女性もあるのだろうか。この隔てが、社会に差別を残しているようにも思える。

三つ目が、男女で分けられる様々なことである。男女で分けることが必要な場面もあるとは思いますが、日常ではその必要性がない部分で男女の壁がある。例えばトイレのマーク

の色、男子が青で女子がピンク。委員会において各会男女二人ずつ。このような場面、なぜ男子のカラーが青か、女子のカラーがピンクか。なぜ委員会は男子二人とか、女子二人ではいけないのか。その違いは何なのか。細かい部分のように思えるが、全体として男女の差を生んでしまっていると思う。

ここまで、日常のなかでの男女差別を挙げてきたが、まだまだ様々に差別が残っている。その全てが作用した結果、事実として社会全体の男女差別が無くならないのだろう。男女差別というのは、性的マイノリティの人などに深い傷を与えている。決して許されないはずなのだ。だが、これを容認してしまっている社会がある。

では、男女差別を無くすにはどうすれば良いのだろうか。僕が考えたのは、日常の小さな所まで目を配り、「これは偏見じゃないかな、差別じゃないだろうか」と一度考えてみる、そういったことを人々が意識して行うことだと思った。そうして、時に議論し、改善し、本当の「男女差別を無くそう」という風潮にもっていく。発言一つ一つに注意して、「差別につながるからやめよう」と、また他人にそう言えるような社会ができれば、次第に男女の偏見、差別はなくなっていくはずである。

もちろん簡単なことではない。何十年間も日本に染みついてきた男女の偏見は、そう

易々と取り除けるものではない。だが本当に差別を無くそうと思うのなら、社会全体が細部まで注意して、「こんなもんでいいか」ですませないことである。差別は決して許してはならない。個人の責任感によって日本はより良くなっていくと思う。



(明石・三木地区予選 奨励賞)

誰もがぐらしやすい社会へ

自由が丘中学校 二年 山下 梨杏

私には体が不自由な祖父がいます。病気で倒れたときの後遺症で左半身が麻痺し、足を思うように動かせず歩行も困難になりました。家の中での移動は壁に設置された手すりにつかまりながら歩き、外出時は車椅子がなければ出られません。今まであたり前のようにしてきた生活とは大きく変わりました。そんな祖父の激変した生活ぶりを見て、普段の生活がどれだけ障がいだらけであるかということを感じ知らされました。お茶を飲むために湯のみにお湯を注ぐこと、お風呂呂に入るために浴槽をまたぐこと、椅子に座るために腰を下ろすこと、車に乗ること、車椅子で移動する際には段差のない道を選び、建物の中に入る時にはスロープがあるか確認することなど、どれ一つとっても今までの私には気にもしなかった行動でした。しかし、祖父にとってはすべての行動に支障が出るので、祖母の介助が常に必要になります。家の中の行動であれば、歩行するときに補助



する手すりを設置したり、移動が最小限にすむように必要なものは近くの場所に置いたりするなどして、生活できるように対策をとることができですが、一歩外に出るとそれができなくなります。

元々が何の不自由もない健康な人のためにつくられたものばかりで、障がいがある人が使用することは想定されていません。バリアフリーに配慮し、通路やエレベーターなどの設備が整った施設はありますが、その数は多くはありません。今までの私がそうであったようにその人の目線に立ってみなければ気付くことができないのです。

先日、祖母からこんな話を聞きました。祖父の通院のために二人でタクシーに乗り、目的地に到着した際に祖父を車から降ろすために祖母が先に降りたところ、タクシーの運転手がトランクに積んでいた車椅子を取り出してくれたそうです。一方、別の日にこの時とは違うタクシーに乗車した際は、運転手はトランクにある車椅子を取り出してくれず、祖母が一人で重たい車椅子を取り出したと聞きました。必ず手伝ってもらえることがあたり前ではありませんが、困っていることに気付ける人は全員ではないと気づきました。だれかが何か不自由に感じていることに気付いてあげることが重要で、ただ単に力になりたいと思っただけでは何の行動も起こせません。全てのことに気付くことはでき

なくても、ほんの少し視野を広げることで周りが見えてくるかもしれません。私の祖父のように障がいを抱えている人に限らず、健常な高齢者にとっても、普段の生活の中でいろいろなことに不便さを感じながら過ごしている人がたくさんいると思います。不自由に感じている人に気づける人が一人でも多く増えればより良い社会になっていくだろうし、私自身もそのような人になりたいと思います。そのために、日頃から小さなことにも目を向けて、祖父だけではなく様々な人の力になりたいです。多くの場所でのバリアフリー化と共に、周りをよく見れる人が増え、誰もがぐらしやすい社会になることを願っています。



(明石・三木地区予選 奨励賞)

素晴らしい未来まで

吉川中学校 二年 板倉 花歩

私の住んでいる町はとても美しい自然が広がっている。しかし、そんな町の至るところにごみが落ちている。草むらや道路、お店の周りなど、見渡すと数えきれないほどの場所で、数えきれないほどのごみが散らばっているのが現状だ。これをいわゆる「ポイ捨て」というのだろう。このような事態に私はいつかこの町が、ごみだらけで住みたくなくなるような町になってしまうかもしれないという不安がこみ上げてきた。

「ポイ捨て」というのは、誰かがこれくらいならという気持ちで捨ててしまい、それが何十人何百人と重なって、「ポイ捨て」となっていく。捨てられたごみは、雨や風によって排水溝などの溝に流れる。そして、海へと流れ着き、回収不可能となってしまう。そうしてごみが今も増え続けているのだ。

私が環境問題に興味を持ち始めたのは、中学一年生の総合的な学習の時間だった。そ

これは、現在の世界で起こっている環境についての問題を調べるといふ学習だった。私は、いざ、環境問題について考えてみても、地球温暖化やごみ問題しか思い浮かばなかった。授業などで題材として考えなければ、生活している中では考えたことがなかったと、その授業で感じた。環境問題と縛ってみると、いろいろな種類の問題が出てくる。例として、海洋汚染や生態系の減少、森林破壊などが挙げられる。これらは全て私たちの身近に起きていることだと分かる。先ほど言った、地球温暖化とごみ問題も同じで、最近ではニュースなどでも取り上げているので、たいていの人は知っているはずだ。なのに、なぜこれらの問題はなくならないのか。それは、まだ世界に大きな異常が起きていないからだ。「〇〇年には、世界はこうなるでしょう」と言われても、大概の人は「そうなんだ」や「こわいな」で終わると思う。それが問題なのだ。問題視されていないから、すぐに解決しそうな問題でも、長々と解決されないまま現在に至ってしまうのである。しかし、できてしまった問題を解決するほうが難しいという点が苦である。これを解決するには、地域全体、そして日本全体、さらには世界全体が、このような問題が起こっていることに気づき、改善しようとする意思を持たなければ変わらないと思う。私はこの気づきをするために、総合的な学習の時間で探求していくのだと、このとき初めて分かった。そして、授業をしたことに

よって、環境問題にすぐ敏感になったと感じる。だから総合という時間があるのだと思う。私は、総合的な学習の時間を受けたことにより、自分が変わった。少しの変化ではあるが自分の生活を見直すようになった。だが、この世界で環境問題について考えている人はどのくらいいるのだろうか。

環境問題と聞いて、知っている人と答える人は多くいるが、あなたは何をしていますかと問われたときにさっと答えられる人はあまりいないだろう。それが、環境問題がいまだに続いている原因だと考えられる。だから、この作文を通して、たくさんの人に環境問題と付き合っていく怖さを知ってほしい。考えてみてほしい。今学生で、何もしないまま大人になったとしよう。地球はどうなっているのだろうか。生活に大きな影響を与える問題が山積みになり、耐えられなくなつて崩れていくだろう。このような事態を絶対に避けなければならぬ。そのために、今を生きる私たちが協力して、できることを精一杯やる必要がある。こうして一つ一つ解決していかねばならない。それは気の遠くなるような時間、全世界の人々の未来を変えようという気持ちと努力。そんなかけがえのないものによって成り立つのだ。あなたも明るい未来を築きあげてほしい。「素晴らしい未来まで……」

## (明石・三木地区予選 奨励賞)

### 自分の想いを

吉川中学校 三年 北山 さくら

私たちはそれぞれに、大切な友だちや家族がいます。一人でないことはとても心強く、日々のありふれた生活の中でもそのことに対する感謝は決して忘れないようにしようと思っています。ですが以前の私はたまに、この大切な存在を、ひどく大きなおもりのように感じてしまうことがありました。

なぜ、そのように感じていたかというと、例えば、好きなものが私だけ違っており、意見が食い違ってしまったときがありました。嫌われたくないと思うあまり私は、どうしても多いほうに意見を合わせてしまいがちになっていたのです。そのほかにも、自分が気にしていることや嫌だと思ふことを言われると、友だちに悪気はないとわかっている、ずっと一人で抱え込んで、長い間落ち込んでしまっていました。そんなことがあるたびに、どうしても寂しさを感じていました。

私の友だちは、性格はバラバラでも、みんな優しく、いざという時には力を貸してくれる心強い存在です。いつもなんてことないことで笑いあえるような、大切な存在です。大切であり、失いたくないからこそ、正面からぶつかることを避けていました。だから、たまに苦しく感じることもありましたが、嫌われたくないと思うのは友だちのことが好きだからであり、友だちの輪の中に自分がないのは絶対に嫌でした。そう思って、友だちが私のことを好きでいてくれるように「自分」を押し込んで、我慢もたくさんしました。しかし、人間には一人一人個性があって、好みも性格も様々です。仲がいい友だちでも、一人一人が違う人間です。本当にやりたいこと、好きなことがあるなら、たとえ意見が違って、も恐れず素直にそう言うべきです。こんなのが好きだ。あれはあんまり得意じゃないかも……。こういうことをしてみたい。そんなことを遠慮せずに言い合えるような関係が本当の意味での友だちで、大切なことだと気が付きました。実際、好きなことなどを素直に言う、友だちは、ちゃんと受け入れて納得してくれました。その友だちとは、正面から自分の意見を言い合えるようになってからのほうが仲が深まったように思います。今ではもう、友だち関係で悩んだりすることもなく、本当の意味で友だちを大切に思うことができています。「自分」を押し込んでずっと自分の中だけで溜め込むのはすごくもったいな

いずす。もちろん相手にも譲れない意見があるかもしれないし、ぶつかってしまふこともあるかもしれない。でも自分のしたいことができなかつたとき、正々堂々正面からぶつかり合つて、それでもできなかつたのか、それとも、嫌われることを恐れ、最初からぶつかりにいなかつたからできなかつたのかで、そのあとの心持ちも随分変わつてくると思うのです。みんな一人一人違ふ人間なので、思ったことは口にしないとわかりません。やりたいことや好きなことを口にするのは悪いことではありません。それぞれが自由にできる権利があります。受け入れてもらえるか、受け入れてもらえないかだけを基準にして人と接するのは楽しくなく、何より生きづらいです。もし皆さんが同じように感じたことが一度でもあるなら、勇気を出して自分のしたいことを口に出してもらいたいのです。誰かが自分の気持ちを我慢するから成り立つような関係は、はたして本当の意味で良い関係と言えるのでしょうか。

もちろん、世の中にはいろいろな性格の人がいます。気を遣いすぎてしまふ人、繊細に物事を受け止める人、周りのことに敏感な人など、それぞれ素敵な個性ですが、それどのように捉え、どのようにそれらと上手に付き合つていけるかが大切だと思ひます。人どう思われるかより、自分がどうしたいかを考えられると、自然と心は軽くなり、肩の



力を抜いて人と接することができると思います。

思いは口にしなければ相手には伝わりません。みんなが生きやすいと感じられる世の中にするためには、ほんの少しの勇気がいります。不安に思うこともあると思います。けれど、私たちにはやりたいことや好きなことを自由に言える権利があります。嫌われたりすることを恐れたり、相手にどう思われるか考えてしまったり何もできないのは、もったいないです。

私はこの自分の作文を通して、同じようなことで悩んでいる人に、ほんの少しでも勇気を出してもらえたらうれしいです。





令和 5 年度

## 人権作文集 第 53 集

差別をなくする輪をひろげよう市民運動

入賞作品集

発行日 令和 6 年 2 月

編集・発行 三木市・三木市教育委員会

この作品集の作品を広報誌に掲載したり、学校・園・所等の教育機関が教材として複製・印刷したりする場合は、三木市市民生活部人権推進課（☎0794-82-8388）まで連絡してください。

